

# バレエ作品における ダンサーの記号的考察

野本 昌

舞踊を体験する方法は大きく分けて二つあると思われる。一つは自分自身が踊ることで、もう一つは舞踊を見ることである。つまり舞踊をめぐって、踊る者と見る者、二つの存在があるといえる。この二者間に何らかのコミュニケーションが発生する典型的な形が、劇場などでの上演を目的とする舞踊である。

特にバレエのように・dance d'ecoleによりコード化されたアカデミックな劇場舞踊またはその正統な拡張に基づいた作品・と定義付けられる舞踊の場合、上演作品に対してダンサー、観客のほかに多くの場合振付家という存在がもう一つ関係してくる。ここでこれから考えていきたいことはこの三者とバレエ作品との関係である。その中でも特にダンサーを中心に見ていきたいと思う。

私たちは日常、コミュニケーションの手段として頻繁に言語を使用している。それによって、言語以外の文化的対象や現象を言語にたとえて「・・・は語る」というような表現を使うことに何の不自然さも感じない。舞踊においても、実際に言葉が発せられることはなくても、その「メッセージ」を言語らしいものとして捉えることは容易であるように思われる。

しかし舞踊は言語とは違う構造を持っており、言語体系の中に組み込んで分析することは不可能と思われる。つまり舞踊において「メッセージ」が生成されると考えるとき、それは言語とはまた別の体系を持った記号だと考える。

そう考えた記号のひとつを例えば『バレエ』とする。このときの記号はエーコにより“他の何か(対象)を表していると解釈されるあるもの”と定義されるものとする。そして同時にある程度の個人の独断ではなく、共同体としての慣習性をもっているものとする。記号『バレエ』のコードは・パ・マイム・ダンサーの見た目などがあげられるだろう。そしてそれらは美的特性により作品ごとに異なるが、慣習的な性格も持ち合わせている。

先に、舞踊において「メッセージ」が生成されると述べたが、その発信・受信行為によるコミュ

ニケーションが成立することは明らかであるが、ではその「メッセージ」を発信するのはいったい誰なのか。振付家なのか、ダンサーなのか。私にはそのどちらか一方に依存して舞踊作品が生まみ出されているとは思えない。

もし作品の創作者が振付家だとすると、ダンサーは作品を上演するための道具にしか過ぎないのだろうか。そこでそれに対する四つの反論が浮かんでくる。

1. バレエの場合よくプリンシパルダンサーの名をとって『～の白鳥の湖』といったりする。
2. スターバレリーナを見せるためだけに作られた作品がある。これは作品がダンサーを見せるための道具に使われていると考えてもいい。
3. 実際に舞台の上で踊るのは生身のダンサーという事実が、絵筆や楽器を道具としてつかうこととは根本的に異なっている。
4. 振付家のなかには、リハのなかでイメージを伝えて実際に動いてもらいそれをそのままあるいはそこからインスピレーションを得て作品を作る人もいる。この場合ダンサーは創作の一端を担っているといえないか？

これらに対して予想される反論もまとめてみる。

- 1 に対しては、もちろん振付家の名前が前面でてくる作品も沢山あるということ。
- 2 にはそのような作品も再演においては必ずしも作品が道具に使われてるとはいえないのではないか。
- 3 には多くの先行研究にみられるように、作品を創出するのは振付家であり、ダンサーはそれを実現するものであるという考え。
- 4 には振付家が絶対的に自分の構想を持っていてダンサーをこまのように動かして振り付ける人もいる。この場合はダンサーは創作活動は行っていないのではないか。

現在上演されているバレエ作品を念頭におくならば、振付家もダンサーも『バレエ』という道具を用いて何かしらのメッセージを生成しているように感じられる。つまりやはり『バレエ』という記号を用いているといえるのではないか。そのときバレエ作品のなかでダンサーの位置づけはどこにあるのかということ記号論の図式の中に当てはめることによって、考えていこうという試みである。